

京極読書新聞 <第24号>

発行日 平成23年 7月 1日(金)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2011

第3回

北海道の爽やかな夏、到来！
京中生たちはいったいどんな本を読んでいるのでしょうか。<編集部>

真田 桃子さん(3年生) 「生きてます、15歳。」 佐古岡 真由さん(3年生) 「1リットルの涙」

——外から中学校の校舎に入ったら、一瞬、クーラーが入ってんのかな…と思いましたよ。いやー、快適。新しい校舎の感想、「広い」「明るい」に続いて「あたたかい」をあげる京中生が意外に多かったのですが、夏場は逆に「涼しい」がつけ加わりますね。

佐古岡 「木」をふんだんに使っている建築だからでしょうか。

——真田さんは、去年に続いて二回目の登場ですね。

真田 去年は、森口愛理先輩と、クロスカントリーつながりで。

——あのインタビューの後、あの写真に映っていた二人がそろって全国大会に出場を決めた時はうれしかったなあ。

真田 いろいろな人や本からパワーをもらっているような気がします。この「生きてます、15歳。」の井上美由紀さんからも命の大切さを教えられました。「おそらく生きても二、三日でしょう」と医者に言われた五百グラムの超未熟児が、今なお全盲というハンディキャップを背負いながらも生き続けていることには感動します。

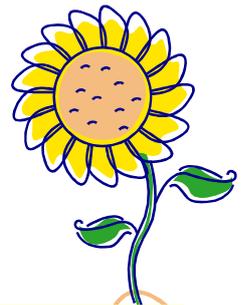
——本当に、「生きてます」「元気です」という、その言葉自体がメッセージですね。

佐古岡 「1リットルの涙」の木藤亜也さんは、美由紀さんと逆で、健康だった15歳の女の子に難病(脊髄小脳変性症)がしのびよってくる話です。死の直前まで、病気に負けたくないという思いで日記を書き続ける亜也さんの姿に心うたれました。

——大学ノートにびっしりと46冊ですもんね！本に出ている日記帳の写真にはびっくりしました。あと、となりの「オリジナルの文字盤」の写真もすごかったなあ。

佐古岡 症状が進んできた23歳の亜也さんには、文字を書く指の力も、言葉を話す口の力もなくなってきて、それでも自分の意志を伝えるために「オリジナルの文字盤」を試行錯誤して作るんです。

——あの「オリジナル」の意味が今の人にきちんと伝わればいいなと思いました。亜也さんが23歳だった昭和61年(1986年)には、まだケータイは登場していません。今の人は「どうしてケータイ使わないの？」って不思議だろうけれど、あれは、メールやインターネットが私たちの生活を包み込むようになる以前の、昭和の世界なんです。だから、あの「文字盤」は、最後の最後まで人間でありたいと願った亜也さんとお母さんの必死の発明作品なんです。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

2ページ目に続きます

真田 どちらの本も、お母さんが印象的です。美由紀さんのお母さんもすごい。美由紀さんの成長につれて、自分から「イジの悪い親」「ヒドイ親」の役割に変身してゆく。木にぶつかっても、石につまづいて転んでも助けない。自分の直面している問題を自分で解決して行くことが、結局、美由紀さんが生きてゆく力になるのだと確信しているからできるのだと思いますけれど、それでも、周囲の冷たい目も気にせずつらぬき通すあのお母さんの強さはすごいですね。

佐古岡 「1リットルの涙」を読む前は「うわあ、こんなの絶対に耐えられない」と思っていたのですが、読んで行くにつれて少し考え方が変わりました。「他の人と違う命を与えてくれてありがとう」という気持ちも生まれてきました。普通の人生を歩けなかった辛さはあったと思いますが、その分、得られたものもたくさんあったことは、この本の中のいろいろな逸話からも感じます。私が物事をポジティブに考えることができるようになったのは、この本のおかげです。

——3年生は、これが最後の一年間ですね。悔いのないよう頑張ってください。



「生きてます、15歳。」 井上美由紀著／ポプラ社
「1リットルの涙」 木藤亜也著／幻冬舎



今年も 教科書展示会、開催中!

今、湧学館1階ホールで今年度の「教科書展示会」がひらかれています。平成23年度の小中学校使用教科書をすべて展示中。

今年度の小学校国語教科書が大変身です。小学校新学習指導要領の全面実施にともない、図書の紹介・案内ページが大幅に取り上げられるようになりました。湧学館と町内の小学校図書室ではこれを受けて、教科書で紹介された本をすべて収集する方針を立てています。湧学館の図書整理用書架一面に集められた紹介本の山をご覧ください。これが第一弾。七月初旬には小学校図書室に到着します。楽しみに、楽しみに待っていてくださいね！



▲ 南京極小学校 受入の図書



▲ 京極小学校 受入の図書

小学校教科書の変化は単に読書案内にとどまりません。各学年、どの教科書をひらいてみても図書館話題が満載。すでに、2年生にして「きみたちは『図書館たんていだん』」のページが登場。「今から、きみたちは『図書館たんていだん』だ。読みたい本をすばやく見つけ出せる、名たんていになってほしい。…」

以下、3年生で「本で調べて、ほうこくしよう」。4年生は「読書生活について考えよう」「新聞を作ろう」。5年生、「わたしたちの『図書館改造』提案」。6年生、「わたしと本」「本を読む楽しみ—長編・読み比べ」。こんなの、ほんの一部です。ほほ、あらゆる章が、なんらかの形で図書館や読書と結びついています。



▲ 小学校国語教科書

この傾向は国語の教科書だからということではないようです。展示会の小中学校教科書を見ていると、かなりの教科が、「どうしたらこの情報を集めることができるか?」「この集めた情報をどのように活用するか?」といった問題解決能力の育成に心をくわいている様子が見えがえます。今の子どもたちを知る一端として、教科書展示会にぜひ足をお運びください。

後志シネマ散歩 第3回 Love Letter

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

後志シネマ散歩。第1回が「喜びも悲しみも幾年月」、第2回が「蟹工船」と続いたので、なにか、後志地方を舞台にした映画は古いものばかり…との印象を持った方もいるかもしれませんがね。でも、そんなことはありません。現代が舞台の後志シネマもたくさんあります。

1993年の「はるか、ノスタルジィ」(舞台:小樽)、「REX 恐竜物語」(舞台:赤井川ほか)。1995年の「Love Letter」(舞台:小樽)。2003年の「river」(舞台:札幌・小樽・石狩)。2004年の「天国の本屋〜恋火」(舞台:小樽)。2005年の「NANA」(舞台:小樽・余市)、「不良少年の夢」(舞台:余市)などがパッと浮かんできます。

あと、個人的には、2006年の前田亜季・窪塚俊介主演の映画「最終兵器彼女」も忘れがたい後志シネマです。この映画、高橋しんの同名マンガを実写(!)で撮りなおしたものののですが、あまりにも客が入らず、封切り後一週間で待たずして上映打ち切りになってしまいました。映画の舞台にもなっている小樽での話です。楽しみに10日目くらいの時に行った私は、茫然自失。世の中には、封切り一週間で終わる可哀相な映画もあるんだと初めて知りました。



「最終兵器彼女」にくらべたら、中山美穂・豊川悦司主演の「Love Letter」は幸せな映画だといえるでしょうね。

【あらすじ】神戸に住む渡辺博子(中山美穂)は山で遭難した婚約者・藤井 樹の三回忌に出席した帰り、彼の実家に立ち寄る。そこで見た中学時代の卒業アルバムにあった小樽の住所に手紙を出すと、返事が届いた。差出人は同姓同名の女性、しかも故人とは同級生同士だった。奇妙な文通のあと、自分に好意を寄せる秋葉茂(豊川悦司)と小樽を訪ねる博子。(「北の映像ミュージアム」推進協議会編/北海道シネマの風景)

この作品が韓国、台湾で大ヒット。特に韓国の反応は凄く、延べ150万人の人がこの映画を観たといわれます。(韓流ブームの元祖「冬のソナタ」も、この「Love Letter」がヒントではないかという説もある)

小樽市によると、2001年には年間1100人程度だった韓国人観光客が2005年には4300人に。台湾人観光客も、2001年の6200人から2005年の14000人に急増です。その観光客の多くが訪れたのが、映画のヒロイン・藤井樹が住んでいた家とされた小樽市見晴町の坂輝彦(ばん・てるひこ)氏の邸宅でした。「イツキの家」として、アジア中の「Love Letter」ファンたちの聖地となったのです。

坂別邸は、2007年5月、火事で焼失してしまいました。北海道の代表的建築家・田上義也(たのうえ・よしや)の設計になる有名な建築物で、もちろん小樽市の歴史的建造物にも指定



されている建物だったのですが、本当に残念です。今となっては、映画「Love Letter」の中でその美しい姿をとどめています。

▲ 在りし日の小樽・坂別邸

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

